

イギリスの中等教育制度改革に関する一視点

— レスターシャー・プランの場合 —

榊 達 雄

はじめに

- 1 レスターシャーの実験・プランの意義
- 2 レスターシャー・プランの問題
- 3 レスターシャー・プラン実現の要因

はじめに

本稿では、イギリスにおいて1950年代後半以降に進行した中等教育制度改革、すなわち、コンプリヘンシブ・スクールに基づく中等教育制度の再編成において、重要な位置を占めるとともに、重要な役割を果たしたレスターシャー・プランを、改めて振り返りながら検討する。その上で、レスターシャー・プランの2段制度が、イギリスの中等教育制度改革を分析するための一視点を与えるものであることを確認しようとするものである。

1 レスターシャーの実験・プランの意義

レスターシャーでは、20世紀初め(1903年)から教育長を務めてきたブロッキングトン(Brockington, William)が引退した後、1947年に教育長に任命されたメイソン(Mason, Stewart)の下で、いわゆるレスターシャー・プランが立案・実施された。メイソンは、1944年レスターシャーにおいて勅任視学官の仕事が始めることになったが、同時に無給の地方当局の行政官の役割も果たすことになり、多くの校長を知ることになった。その中に、後にレスターシャーの実験校となった2校の校長が含まれていた¹⁾。

よく知られているように、イギリスでは、第2

次大戦後の教育改革は、1944年教育法に基づいて進められたが、中等教育のタイプについては同法に規定されていなかったにもかかわらず、労働党政府の下で3分類制度が普及させられた。

国中のほとんどの地域で、3分類制度は肯定的に受けとめられ、レスターシャーでも同様であった(レスターシャーでは、実質は2分類制度)。メイソンは、グラマー・スクールが時代の変化する要請に応えるために、いかに大きく変化してきたかを十分に認識せずに、現状維持の用意があったという。同様に高等小学校の発達に注目し、同様にモダン・スクールとして地位の平等と「同等な尊重」を達成する機会が与えられることを歓迎した。グラマー・スクールおよびモダン・スクール双方において、教育の概念が広がった。グラマー・スクールは、伝統的なアカデミックなカリキュラムを超えて、美術や音楽のような文化的な科目により注意を払うようになり、科学者や技術者の必要に応ずるようシラバスを拡大するようになっていく。モダン・スクールは、職員不足および場合によっては不適切な敷地という大きな困難の下で苦闘しながら、真の中等学校の地位獲得に向けて大きく前進してきた。モダン・スクールの知能のより低い部分にとって適当な内容と質の教育が前進し続ける一方、他方知能のより高い生徒の少数

だが急速に拡大するグループに対して、GCEに至るコースの広範囲の提供が極めて顕著に行われてきた、とメイソンは考えている。このことについて、二つの理由をあげている。第1に、11歳での選別は、その後の発達により様々な科目のGCEを受験できる多数の子どもを見逃すことである。第2に、社会的圧力のために、モダン・スクールが大多数の父母を満足させるに十分な程度の公的な尊重を獲得すべきであるとするなら、「グラマー・スクール・コース」を提供せざるをえないと感じていることである。レスターシャーでは、モダン・スクールはこういう性質のコースを確立するよう奨励されてきた。にもかかわらず、こういったコースは、すでに過重労働となっている職員に非常に大きな緊張をもたらす。というのは、多数の延べ時間数が相対的に少ない生徒集団に集中されなければならない、そして国中の視学の視察報告によれば、かなりこういったコースは、学校の主要な集団の犠牲の上に達成されているに過ぎないようであるからである。あらゆる角度からいって、特にGCEを受験できる生徒に学校を提供したり、他の学校では特にGCEを受験できない生徒のための学校において、こういったコースを2倍・4倍にすることは、不合理なことだけでなく、非常に無駄なことである。以上のことは、中等教育に関するすべての議論のうち、11歳での選別という中心的な論争点に立ち戻らせる、としている²⁾。

レスターシャーでは、2分類制度（全国的には3分類制度）が当然のものと受け取られ、その中で父母・生徒の要望に応える努力がなされていたわけである。しかし矛盾もまた、蓄積されていったといつてよい。

メイソンは、前述のように視学としてだけでなく、無給の地方行政官として学校現場をよく知ることができる立場にあったため、11歳試験にまつわる問題を身近な問題として把握していた。メイソン自身にとって、この問題は二人の息子と結びついていた。二人の息子は、ウィンチェスターの奨学金を得たけれども、2番目の息子は、癲癇で苦しんでおり、11歳試験に困難を感じていたため、

メイソンは、能力を超えたアカデミックな課題に成功するという圧力が、子どもに課されることの惨めさを個人的に経験することになっていた。この少し後に、彼は11歳試験を廃止する方法に集中し始めたのである³⁾。

レスターシャーでも、11歳試験は子どもの家庭に多くの悲劇をもたらしていたわけである。レスターシャー・プランは、11歳試験廃止の方法でもあったという意義をもっていたといえる。

メイソンは、知能が一定であるというかつての考えは、過去のものとなったと理解している。モダン・スクールのGCEコースの経験、2課程学校から得られた経験によれば、後の知能の成長、良家の父母の支援、頑固な性格の質が3、4年後に若者に何をもたらすかを予測することはできない。独立学校で採用された13、14歳の移行年齢を支持する心理学の議論がある。グラマー・スクールの定員の同年齢集団に対する比率は、偶然なものであり、レスターシャーでは25%であるが、レスターシャーの2課程学校での経験では、多分アカデミックなコースから利益を得ることができるのは、40%であるだろう。一般にコンプリヘンシヴ・スクールの支持者によっても反対者によっても認められていることは、生徒の年齢の点からもカリキュラムの点からも、中等教育の全範囲を提供しなければならない学校は、非常に大きな学校になるに違いないということである。相対的に小さなコンプリヘンシヴ・スクールでは、第6級が貧困化する傾向がある。メイソンの考えでは、生徒数1500人以上の学校内の共同生活および教育上のストレスは、コンプリヘンシヴ・スクールのために主張されている利益を上回る問題を創出する。大規模学校のために、校長が教授責任も生活指導責任も免除される管理者になる制度は、避けたいと思っている。外部試験による選別を放棄するときコンプリヘンシヴ・スクールの利益をもつと同時に、既存の中等学校校舎に適応できることになる新制度は、中等段階内の生徒の分割が現在のようには垂直的ではなく、水平的なものであるように思われる。そのような解決は、コンプリヘンシヴ

制度がするように、モダン・スクールやグラマー・スクールを一扫せずに、しかしそれらの機能を修正することによって、可能である、とメイソンは信じている⁴⁾。かくして、レスターシャーでは、このような解決の実験が行われることになる。

実験に至るまでに、中等教育が11-18歳の一貫制だけでなく、独立学校のように13, 14歳で区切りがありうることを示したことが、グラマー・スクールの定員が偶然なものであること、中等教育の全範囲を提供する一貫制コンプリヘンシヴ・スクールは大規模学校になり、小規模の場合は、第6級が貧困化する傾向があること、新制度の実験は、能力の上下による垂直的な生徒の分割ではなく、水平的なものであり、しかも現存の校舎で間に合うことは、実験が容易に受け入れられる可能性を暗示するものである。

実験では、グラマー・スクールは、単一の教育単位を形成するために、多くのモダン・スクールと接合される。全生徒が適当なモダン・スクールに入学し、最初の3年間そこで教育を受ける。ほとんどの生徒にとって、初等学校からの移行年齢は、通常の11歳であるが、15歳でGCEの普通レベルを受験する優秀な少数の生徒は、1年前に移行できる。中等コース3学年修了時に、グラマー・スクールへの移行が、生徒が少なくとも16歳に達する学年修了時までとどまることを、親が認める用意のあるすべての生徒に開かれる。少数の生徒は13歳で、多数の生徒は14歳で移行する。モダン・スクールに残る生徒は、義務教育年限の15歳までとどまる。この再編成には、二つのタイプの学校の機能上のいくつかの変化が含まれる。モダン・スクールでは、GCE上級コースに進級するつもりで適したカリキュラム、第2言語、ことによるとラテン語を提供する。グラマー・スクールでは、GCE上級コースに合わない生徒には、技術や半職業的な種類のコースを提供する。名称については、グラマー・スクールはそのままとし、モダン・スクールは「ハイスクール」とすることにした。この再編成により、GCEコースを発達させていたモダン・スクールは、ハイスクールに

なると、そのコースの終わりまでそのコースの生徒達を見ることはできない失望に直面しなければならないが、その代わりその代償として、グラマー・スクールに「引き抜かれていた」優秀な生徒達すべてを受け持つことになる。ハイスクールになることの利点には、11歳試験に失敗した1年生の生徒から挫折感を排除することに、多くの労力を費やしてきたことから開放されることなどがある。グラマー・スクールでは、第6級が拡大され、巨大な刺激を与えられるであろう⁵⁾。

レスターシャー教育委員会は、予め決められた将来の日まで実験のパターンを他の地域に拡大するのを待つことは、望ましくもないし、「科学的」でもない、と結論づけ、「レスターシャーの実験」という題目に異議を唱え、「レスターシャー・プラン」と呼ぶことに決めた。教育委員会は、最初の二つの地域（都市地区のヒンクリーおよびオードバイウィグストン）から、ブリストルに中心を置く第3の地域、そのほかメルトン・モウブレイに中心を置く州北東部、コールヴィルに中心を置く西部に拡大することを提案し、また望んでいる⁶⁾。

レスターシャーの実験およびプランにおいて、モダン・スクール（ハイスクール）とグラマー・スクールを並列させなかったことは、学校体系の単線化（13, 14歳まで）へ向けた前進と評価できる。グラマー・スクールへ移行する際に、11歳試験のような試験を行わないことも評価できよう。レスターシャーにおいては、11-18歳の一貫制のコンプリヘンシヴ・スクールの第6級は小規模にならざるをえないのに対して、2段制度の下での第6級は、規模も大きくなり、内容的にもより充実したものにできる利点がある。

ペドレイ（Pedley, Robin）は、レスターシャーの実験が始まって間もない頃に、功罪の最終判断には早すぎるが、いくつかの結論は引き出せるとして、2点をあげている。第1に、オースドックスなコンプリヘンシヴ・スクールの地域と同様に、地方の下級学校（小学校）への11歳試験の圧力が、軽減されることである。第2に、多分主要な利点

は、前「モダン」スクールの変質である。1944年以来初めて、総合的な鎖の中の必須の環として、日の当たる場所をもつことになる、というのである⁷⁾。

カークホッフ (Kerckhoff, Alan) らは、メイソンが1957年に州参事会向けに執筆した覚書の中で、指摘した実験計画の利点を肯定的に紹介している。第1に、11歳は、子どもの適性を決定するには早すぎる年齢である。第2に、教育次長の計算では、二つのパイロット地区は、追加の建築の必要なしに再編成が可能である。多分巧妙な技は、グラマー・スクールの閉鎖等なしに再編成が達成できることである、としている。とりわけ現存の建物を利用して、コンプリヘンシヴ教育へ即座に移行することは、問題の巧妙な解決策であることについて、サイモン (Simon, B.) の文章を引用して強調している⁸⁾。

11歳試験自体はなくなるので、この点で他のコンプリヘンシヴ・スクールと同様の役割を果たすことは確かである。モダン・スクールはすべての生徒が入学する中等学校となるので、3分類制度下のモダン・スクールとは異なる地位を獲得することとなるわけである。やはり大きな特徴は、現存の校舎をそのまま使えるので、2段制度への移行も即座にできることであろう。レスターシャー・プランは、その利点により、コンプリヘンシヴ・スクールを普及する上で大きな役割を果たすことになる。そして2段制度は、1965年の訓令10/65⁹⁾においても、大きな位置を占めることになった。

2 レスターシャー・プランの問題

レスターシャー・プランの最大の問題は、13、14歳で親の選択によって、グラマー・スクールに移行する生徒と義務教育年限までハイスクールに残るものとに分けることである。試験はなくなるが、13、14歳時に親の選択が試験の代わりをするわけである。13、14歳で生徒を別の学校に分離する2段制度は、1965年の訓令でも、完全にはコンプリヘンシヴでないといわれていた。

ウェストライディングの教育長は、レスターシャーの計画は、14歳の移行決定における親の選択のために、真のコンプリヘンシヴではなく、望ましいモデルではないとしていたといわれる¹⁰⁾。

ベドレイは、2段制度が抱える主な問題として、①14歳でグラマー・スクールに移行しない第4学年の生徒達への教育の提供、②グラマー・スクールとハイスクールとの間の関係、をあげている。①の生徒達は、概して能力が平均以下で、最終学年の教育にほとんど目的をもたない。この生徒達は、級長としてリーダーシップや模範を提供したり、コントロールを行うことを期待されえない。実際的な科目、商業科目、技術科目への控え目な傾斜のあるコースが工夫されてきた。しかしこれまでにハイスクールは、こうした生徒の興味の魔法の鍵を発見してきた、と主張しないであろう。教員カレッジまたは類似の団体の試験が受験されるハイスクールもあるが、外部試験が受験されないハイスクールもある。他方、新しい計画は、第4学年離学者の以上の問題を創出しなかった。この問題は、かつての「モダン」に存在したものである。悲劇的なことには、かなりのグラマー・スクールの第4学年CストリームおよびDストリームに存在している。そこでは、無視された能力の劣っていない生徒は、ときどき憤慨した反逆者に変えられる。新しい秩序は、ハイスクールから憤りの要素を取り除いた。実際により有能な生徒がグラマー・スクールに移行したために、残る生徒は責任を果たすべき地位と機会を享受する、としている¹¹⁾。

ヒンクリー地区、オードバイ-ウィグストン地区それぞれの学校では、最初の生徒編成は、ハイスクールの達成評価と潜在能力（各生徒の詳細な報告が送付されてきている）を考慮して行われる。ヒンクリー・グラマー・スクールでは、14歳で移行してきた生徒は、広く二つのストリームに分けられた。一つは、GCEの何科目かを受験しようとする生徒を含み、もう一つは、GCEを受験しない生徒のためのものである。両グループのカリキュラムは基本的に類似している。生徒は、時間

のほぼ半分は、その能力に従って広くグループ化されるが、理科、英語、数学ではセッティングが行われる。オードバイ・ウィグストン地区のガスラクストン校では、生徒の編成はより複雑である。最初の年（1957-58年）14歳で移行した生徒は、多様なクラスに編成されるが、一つには能力によって、一つには興味によってである。少数の生徒は、11歳で合格して直接に入学したクラスに加わる。ほかの三つのクラスは、できるだけGCEを目指す。一つのクラスは、工芸の傾斜をもち、もう一つは商業の傾斜をもち、他の一つは、試験を目指さない生徒のための特別のクラスである。どんなクラスからも他のクラスに移ることについて、厳格な障害はない。ハイスクールでも、ストリーミング、セッティングが採用されている¹⁰。

平均以下の能力の生徒がほとんどとなるハイスクールは、矛盾した問題をもつことになる。リーダーシップを発揮した経験をもたない生徒ばかりの場合、生徒集団づくりはむずかしいし、目的をもたない生徒に興味をいかにもたせるかの困難もある。その中でも、責任を果たすべき地位と機会を得た場合、何らかの効果が生まれるかもしれない。他方で、グラマー・スクールでは、C、Dストリームに入れられた生徒は、能力が劣っていないのに当該ストリームに入れられたことに憤慨するという事態は、ストリーミング¹⁰が常態になっている場合、避けられない問題である。一般にストリーミングおよびセッティングは、グラマー・スクールだけでなく、ハイスクール、さらには初等学校でも採用されている。このようなことは、コンプリヘンシヴ・スクールの理念とは一致しないであろう。

カークホッフらは、1965年の訓令との関係で、レスターシャー・プランについて次のように述べている。「レスターシャー・プランは、コンプリヘンシヴ教育を確立する手段として、提出されたものでは決してなかった」。1965年までには、普遍的なコンプリヘンシヴ化支持を意図する労働党政府にとって、メイソンはもはや進歩主義教育家というお気に入りではなかった。労働党の学校担

当大臣であるプレントイス（Prentice, Reginald）は、1965年の訓令の2か月前に、レスターシャーの14歳での選別形式の保持は、政府にとって受け入れがたいと警告していた。任意の移行の弱点は、メイソンにとって2点からすでに自明になっていた。すなわち、現存の上級学校へ移行する女子生徒の割合が相対的に低いことを示唆する内部の証明の結果としてだけでなく、階級的要因が生徒の移行において果たす重要性を強調していると思われるレスター大学の研究からも、そうであった。例えば1964年の数字が示すところによれば、中産階級が優勢であるオードバイ地区の85%は、地域の上級学校へ移行したが、これに対して労働者階級のヒンクリーではわずか39%であった、としている¹⁰。

上級学校への移行の割合が全体としてそれほど高くない段階において、女子生徒の割合が相対的に低いことは、一般的にいわれることであり、レスターシャー・プランにおいてもこのことが現れているといえよう。学校制度は、完全に単線型であっても、階級的性格は免れないといわれるが、親の選択による振り分けがあるレスターシャー・プランの場合は、上記のようにこの点が明確に現れているといえよう。

レスターシャー・プランが地域によって、受け入れられない場合もある。同プランに関する議論が公開されると、メルトン・モウブレイおよびアシュビィ・ド・ラ・ズウシュにおけるグラマー・スクールの教師や理事のグループから、抗議が寄せられた。アシュビィ男子学校の理事からの訴えが明確に例証したことは、グラマー・スクールへの愛着が、教育革新に参加する欲求よりもより強いままであることである。この論争は、1960年夏の政府代表派遣の理由ですらあったが、この時までには、州の西側へのプランの計画された導入は、不十分な財政のために延期されていたために、議論自体は幾分理論的なものであった。メイソンは、多分「オブザーバー」として会議に出席し、精力的に提案を擁護したが、満足な長期的な解決が見つけられないならば、州の当該部分において、不

本意ながら2分類制度を実施し続けることを容認せざるをえなかった、とされている¹⁵⁾。

メイソンは、2分類制度支持者によるプラン反対の場合について検討している。受け取られてきた苦情は、移行期間中継続してグラマー・スクールに直接入学するという、「2分類制度」のなごりから生じているにすぎないといわれうる。明白に2分類制度の方を好む少数の親がいるかもしれない。その親というのは、通常一人かせいぜい二人の非常に賢い子どもの親なのである、としている¹⁶⁾。

グラマー・スクールへの愛着も、2分類制度の方を好むことも、一定に影響力があるのは、社会的に伝統的なエリート学校としてのグラマー・スクールを存続させようとするところからきているのであり、表面的には単なる愛着、なごりであるようにみえるだけである、と考えるべきである。

3 レスターシャー・プラン実現の要因

カークホッフらは、メイソンとウェストライディング¹⁷⁾の教育長であるクレッグについて、両州の革新的な成功は、二人の教育長の顕著なダイナミズムに負うところ大であるという。両者の貢献は、それぞれの州を超えていた。二人は、コンプリヘンシヴ教育における新秩序の重要な形成者であり、その秩序は、厳格さよりむしろ弾力性を、および巨大な一貫制のコンプリヘンシヴよりむしろ現存の小規模学校を活用する段階化計画を強調した、としている¹⁸⁾。

レスターシャー・プラン実現の要因にはやはりまず、キー・パーソンとしてのメイソンの存在があげられる。前述のように、メイソンは勅任視学官および無給の行政官として、レスターシャー内の学校の状況を熟知し、多くの校長らと知り合いになったことは、レスターシャー・プラン実現においてプラスの役割を果たしたといえよう。

レスターシャーでは封建的制度が根強くあるが、そのことにより、かえってメイソンのような行政官は、有力な州参事会議員の個人的支持を得ていれば、並はずれた権限の行使も可能となった。こ

のことは、レスターシャーの実験を開始し、その次の州全体に計画を拡大するうえで、助けとなった、とカークホッフらは述べている。そして、メイソンは、レスターシャー州参事会議長かつ教育委員会議長であるマーチン (Martin, Sir Robert)、およびその後継者ロイド (Lloyd, Colonel Pen) と特に強い提携を結んでいた、としている¹⁹⁾。ジョーンズ (Jones, Donald) も、レスターシャー・プランの実施の成功は、参事会における指導的人物であるこの二人によっていたと述べている²⁰⁾。

教育改革は、政治との関係を見無視しては進められないことを、メイソンは意識していたといえよう。レスターシャー州参事会は、しっかり保守に支配されており、教育問題が政治的教義によって着色されなかったので、レスターシャー・プランに対して、政治レベルで批判がないことは注目すべきである、とカークホッフらは述べている。またメイソンは、レスターシャーのグラマー・スクールを破壊する願望はもっていなかった。それらのほとんどは、長い伝統とすぐれたアカデミックな評判を保っていたからであった。教育長の覚書では、「コンプリヘンシヴ」という用語は一度も言及しなかった、とされている²¹⁾。メイソンは、レスターシャーが保守的な地域であることを意識していたと思われる。

ジョーンズも、政党支部が教育政策形成においてほとんど役割を果たさないことを指摘している。メイソンの記憶では、教育論争問題に関して、政党の方針に基づいて単独の決定がされたことはなく、予め特定の政党によって決定されたこともなかった。教育委員会付託のどんな覚書もそれぞれの功罪に基づいて議論され、教育委員自身の良心にしたがって投票された。州議会からの干渉がないために、州職員は多くの自由を享受した。メイソンによれば、州参事会議員とその職員との間には、強い信頼感があった、といわれる。こういった特殊な社会的・政治的環境すべてが重なり合っ、メイソンは、保守的な、主として農村の州において、普通は都市の社会主義的な自治都市と結

びついた種類の教育改革を、達成することができた、としている²⁰。

ジョーンズの最後の指摘は、注目される。コンプリヘンシブ・スクール批判の一つは、それが社会主義をねらっている、というものであった。確かにコンプリヘンシブ・スクールを推進している当局には、労働党支配の地方教育当局が多かったが、保守党支配の当局でもコンプリヘンシブ・スクールを進めている事例があり、レスターシャーはその例であるわけである。レスターシャーでは、以上のように教育長メイソンの存在が大きかったが、充実した第6級を実現するには、11-18歳の一貫制のコンプリヘンシブ・スクールよりも2段階制度の方がよいという、客観的条件があったことを忘れてはいけない。当然さらにその背景ないし前提条件として、イギリスの経済制度全体が中等教育段階の単線型を求める基底的要因となっていたことである。

また、レスターシャー・プランに代表される2段階制度が、1965年の訓令において大きな位置をしめたことも、留意すべきである。2段階制度は、親の選択という弱点をもっていたが、コンプリヘンシブ・スクールを発展させる上では大きな役割を果たしたといえるからである。1944年教育法によって、従来中等教育段階の教育にもかかわらず基礎教育に位置づけられてきた教育が、すべて中等教育に位置づけられて、実際に実現したのが3分類制度であった。3分類制度は、その意味では「すべての者に中等教育を」与える役割を果たしたわけである。3分類制度がこのとき果たした役割に比して、2段階制度は、コンプリヘンシブ・スクールを普及させる上で、より積極的な役割を果たしたといつてよい。

保守的な地域にもかかわらず2段階制度が発展したことについて、上記の理由以外に、教育が人間の成長・発達を促すという、教育固有の性格にも留意すべきである。教育は、巨視的にみれば上部構造として階級的性格をもつが、他方直接的には教育を受ける者すべてに等しく人間としての成長・発達に影響を与える。メイソン自身自分の子ども

の一人が11歳試験に失敗し、その子どもはもとより、父親としてのメイソンが悩みを経験したことは、よい例である。政治的に保守的な中産階級の人にとって、統計的には11歳試験に合格する比率は中産階級の子どもの方が労働者階級の子どもより高くても、自分自身の子どもが必ず合格するとは限らないわけである。とすれば、親が選択すれば、伝統的な中等教育を保証するグラマー・スクールに誰でも入学できる2段階制度は、中産階級の親にとっても魅力的であることになる。11歳試験に合格する見込みがないと思われていた子どもの親にとっても、すべての子どもが平等に同じハイスクールに入学し、選択すれば平等にグラマー・スクールに移行できることは、魅力的である。こうしたことも、レスターシャー・プランの2段階制度が受け入れられ、広まったと考えられる。

(注)

- 1) Jones, Donald, *Stewart Mason: The Art of Education*, Lawrence & Wishart, 1988, pp.34, 36-37
- 2) Mason, Stewart C., *The Leicestershire Experiment and Plan*, Councils and Education Press Ltd., 1960, pp.5-6
- 3) Jones, op.cit., p.54
- 4) Mason, op.cit., pp.7-10
- 5) *ibid.*, pp.10-16
- 6) *ibid.*, pp.19-20
- 7) Pedley, Robin, *The Comprehensive School*, Penguin Books Ltd., 1963, p.148
- 8) Kerckhoff, Alan, et al., *Going Comprehensive in England and Wales: A Study of Uneven Change*, The Woburn Press, 1996, pp.122, 131-132
- 9) Circular 10/65(12th July 1965) To Local Education Authorities and the Governors of Direct Grant, Voluntary Aided and Special Agreement Schools
- 10) Kerckhoff, op.cit., p.127

- 11) Pedley, op.cit., p.150
- 12) Mason, op.cit., pp.21-22, 27
- 13) ストリーミングは、一般的能力によって分けられる能力別編成であり、セッティングは、科目ごとの能力別編成をいう。
- 14) Kerckhoff, op.cit., p.130
- 15) ibid., p.126
- 16) Mason, op.cit., p.31
- 17) ウェスト・ライディングは、初等・中等教育にまたがる中間学校（9－13歳）を含み、初等・中等教育を3段階化して、コンプリヘンシヴ教育を進めた。
- 18) Kerckhoff, op.cit., p.134
- 19) ibid., p.121
- 20) Jones, op.cit., p.64
- 21) Kerckhoff, op.cit., p.125
- 22) Jones, op.cit., pp.37-38